ベストクラス選定理由書

作成者：安部洋一郎，瀬川奈美，松村宜彰，久松未樹，宮元博章，藤木裕一

科目名称　心理統計研究法演習　昼間クラス （担当教員名：秋光恵子）	
課　　程　：大学院（修士）	開講時期　：　前期
授業形態　：　演習	授業規模　：　30 人以下
インタビュー対象教員名　秋光恵子 （実施日時：平成 28 年 7 月 21 日（木）14:50～15:50　；　実施場所：総合研究棟「中会議室」）	
インタビュー対象受講者名　南光和幸，青山　翔，藤井亜希子 （実施日時：平成 28 年 8 月 2 日（火）14:50～15:50　；　実施場所：総合研究棟「中会議室」）	

選定理由

本科目は、学校心理・発達健康教育コースでの学修と修論研究に必要不可欠な心理学の研究方法論の基礎を学ぶために設定された演習科目である。受講生のうち大学で心理学を専攻してきた者はほとんどおらず、この授業で学ぶ統計法の知識や心理学実験、仮説検証的な思考法については「ゼロから学ぶ」ことになる。基本的に個別学習形式の授業であるにもかかわらず「クラス一丸となって頑張った」「助け合いながら互いの知識を高め合うことができた」といったコメントにあるように学生同士が互いに教えー学び合い、能動的に学べた点が高く評価されている。こうした充実した学びが成立した要因として以下のような特長が挙げられる。

① 挑戦的な課題設定と成長実感：本科目は多くの受講生にとって未知の知識であり、かつハードルの高い内容であったため、真剣に取り組まざるを得なかったという。現職教員も学ぶ側の立場として「わからないことのつらさ、もどかしさ」や教師に当てられて答える緊張感を再認識する一方で、「わかるようになっていく」達成感や成長実感が得られる悦びを経験できた。

② 学習の意義の明瞭さ：本授業はコースでの学びと研究に直結するものであり、知識を得るに従って、「学術論文が読めるようになった」、「研究の論理的な穴が発見できるようになった」、「実践を客観的にデータ化して分析することの意義が理解できた」等、学習の有用性が直に表れ、納得できるものであった。

③ 人間関係づくりのプロセス：同コースの院生のみという共同体意識を醸成しやすい状況に加えて、本授業の課題の新奇さ、難しさは学生間で立場や経験、世代等の違いを越えて連帯し、協力し合う学びを自然と誘発した。その結果、明るく、支持的な教室の雰囲気がもたらされた。

④ 教員の工夫や配慮：教員は学習内容の難易のレベルを慎重に設定し、必要最小限の知識を精選した。学生の躓きやすいポイントを押さえた上で前時の復習に力を入れ、学生の表情から理解度を確認しつつ「そのうちに必ずわかるようになるから」「絶対に役立つから」といった励ましの言葉をかけたり、授業内外で学びを共有し合える環境を整える等の配慮を怠らなかった。

インタビューにおいて、教員は受講生について「学びの本来の姿をライブで見せてもらっている」「(今回ベストクラス候補に選ばれたことを)皆さんのがんばりが認められたよと伝えたい」と語り、一方、受講生達も担当教員の厳しくも支援的な姿勢に感じ入り、その熱意に応えたい気持ちで取り組んだと語った。このように本授業は、「教えるー学ぶ」というしっかりした枠組の中で、教師と学生の相互信頼が築かれ、それが学生達の主体的な学びの成立につながった事例であると考えられる。